

2019 年秋

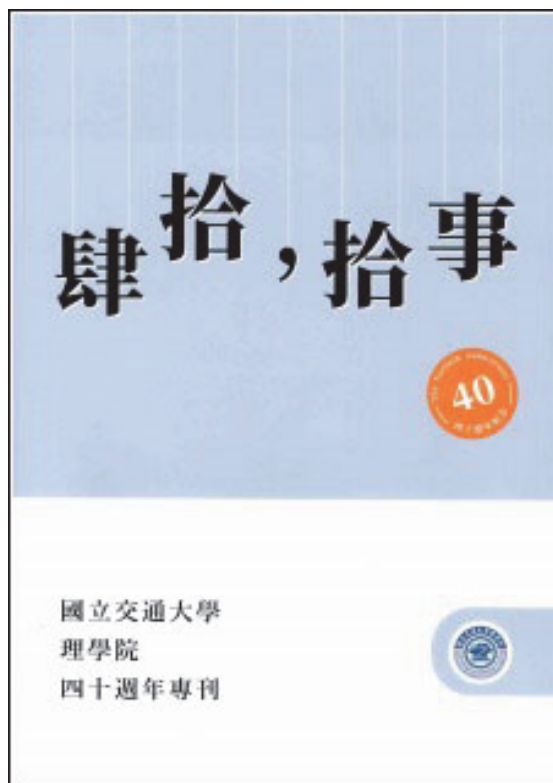
國立交通大學理學院

四十周年專刊（2019 年秋發刊）の

肆 啟山林者（歷代理學院長に聞く）

「獨飛，領飛，放手飛」 李 遠鵬

より、増原に關係する部分の和訳



目錄

目錄 p.1
謝詞 p.2

肆

一

啟山林者

——歷任院長專訪

郭南宏 p.74	黃為德 p.80
鄭國順 p.83	郭義雄 p.88
郭滄海 p.93	褚德三 p.97
林松山 p.102	張豐志 p.108
李遠鵬 p.111	莊振益 p.118
盧鴻興 p.123	李耀坤 p.127
陳永富 p.133	歷任院長餐敘 p.140

啟山林者

獨飛，領飛，放手飛

李遠鵬

採訪 / 吳盈熹、范瑀真
撰文 / 范瑀真

學而優則仕，這條路徑不只是古代讀書人的「指定賽道」，在今日台灣亦為學界鉅子拓展事業第二春的熱門選項。但也有一群「學術狂人」，若擔任行政顯要是「江山」，研究與教學是「美人」，他們肯定直奔美人懷抱。交大理學院的箇中代



「いざ、国際化へ」

—日本人研究者の長期駐在—

李遠鵬教授が理学院院長として在職した3年間において、最も代表的な実績は交通大学応用化学科と電子物理科における国際交流の推進である。現在、交通大応化の教員一覧を見ると、「紫綬褒章」を受章した増原宏教授と浜口宏夫教授をはじめ、多くの日本人教授の名前を見つけることが出来る。世界的に著名なフェムト秒分光の小林孝嘉教授は交通大電物科において10年以上の長期にわたり研究を行っており、また、昨年には低温物理の河野公俊教授が交通大へ移り、研究を開始している。

李教授は、いきなり著名な日本人教授をフルタイムで交通大へ招聘するのは難しいと考え、まずはその学生を招聘することから始め、学生との交流を深めたうえで、教授陣を招聘しようと計画した。交通大からは潤沢な研究費が用意され、准教授や助教も含めたグループ全体を招聘することで、日本人教授たちが交通大に魅力を感じ、招聘に応じる可能性が高まると考えた。

数年後、数名の著名な日本人教授の招へいが実現した。日本人教授たちは研究設備を交通大に移し、交通大で研究を続けることになった。昨年、河野教授は彼の研究設備を交通大へ移しただけでなく、理化学研究所から獲得した1年あたり1000万円の研究費を持って交通大へ移って来た。

日台交流を積極的に推進：驚くべき行動力を持つ増原宏教授

日本から来た教授陣のうち、台湾に最も貢献したのは増原教授である。増原教授の貢献に

ついて、李教授は淀みなく紹介した。十年ほど前の増原氏との短い会話がきっかけとなり、当時は思いもよらなかった活発な日台交流の扉が開いた。当時、李教授は増原教授の生徒たちを交通大に呼ぶことを計画し、まず最初に増原教授を交通大へ招待した。当時、増原教授の研究をサポートしていた日本の財団法人が都合によって解散することになったこともあり、李教授は増原教授に台湾に移って研究を続けてはどうかと提案した。その当時は増原教授も容易には信じられないような提案だと感じたに違いない。

李教授は呉重雨交通大校長からの全面的な協力と台湾政府の教育部から潤沢な資金の提供を受け、増原教授と積極的に話し合いを進めた。研究費を用意するだけでなく、日本の講座制を台湾でも実現できるようにすると李教授は請け負った。「日本の大学の研究体制は台湾のそれとは違っている。日本では基本的にグループで研究を進める。1つの研究室には教授のほか、准教授、助教が必ずいる。准教授や助教が独立して研究室を持つ台湾の制度とは違う。これを理解し、増原教授が台湾に来て日本と同様の研究体制を維持することが出来るように準備するつもりだ、と増原教授に話した」。双方が合意に達してから2カ月足らずで、交通大応用化学科は増原教授のために全ての手続きを完了し、研究室と設備を整えた。「増原教授の台湾への貢献度は、他のどの教授よりも高いと私は確認している」。増原教授は自分の研究に邁進するだけでなく、台湾の若手研究者を日本の学会に連れて行き、発表を行えるように手助けし、そうした中で両国の若手研究者同士の繋がりも深まるように努めた。そのうちの数名は講演奨励賞を受賞したこともある。また、増原氏は40名の若手研究者が在籍する日本のJST増原さきがけプロジェ

クトの責任者として指導していた。「増原教授は、プロジェクトの研究者を台湾へ招いた。彼は日本の若い世代の研究者も台湾のことをよく知り、台湾の若手研究者と交際し、関係を深める機会を持つべきだと考えている」。

近年、増原教授の影響力は「研究方面」のみに留まらず「教育方面」にも及んでいる。例えば、いくつかの日本のスーパーサイエンス高校の先生と生徒が海外研修旅行で交通大を訪問したいという希望を受け入れ、交通大の施設を紹介し、学生間の交流を推進する機会を創成している。1校だけではなく、毎年2・3校を受け入れ、その結果、合計80人～100人の日本人高校生が交通大を訪れている。他にも、毎年夏休みには海外の有名な教授を講師として招待してサマーコースを行っている。昨年は日本の大学院生が25人参加した。今年はオーストラリアからの大学院生も参加した。このような活動によって、増原教授は台湾の若手研究者に早い時期から国際的なネットワークを築くきっかけとなる素晴らしい機会を与えている。「彼は本当にエネルギーで活動的だ。このような国際交流は我々台湾の学生にとって何よりも貴重な経験になる」と李教授は称賛している。

このような増原教授による活発な交流推進によって、交通大の知名度は上がり、ますます多くの日本人教授が交通大へ移り研究を行っている。国際的なハイレベルな学者が交通大を訪れ、台湾の研究文化に多くの活力を注いでいる。更に、自身の研究キャリアを台湾でより長く続けることができるというのは、日本人教授にとっても良い選択となるだろう。そして、特筆すべきことに、交通大の増原研の卒業生の1人が、これまでの国際交流の機会を生かし、日本の関西学院大学の助教に就任している。

相互に利益をもたらした10年以上にわたる交流は、歴代の学部長によって引き継がれ、歴代の校長の強力な支援を受けてきた。李教授は、これらの交流を最初に始めた先駆者で、彼の功績を全て後継者に引き継いだ。「天の時は地の利に如かず。地の利は人の和に如かず。これらはすべて交通大学の開放的な校風と管理部門の柔軟な協力体制があってこそ実現したことだ。また、教育省の5年間500億元がなければ実現できなかった。呉重雨校長と、後任の呉妍華校長、張懋中校長に感謝している。彼らは私を完全に信頼し、強力なサポートを与えてくれた。細かなことについて指示を仰ぐ必要もなく、自信を持って様々な交流計画を推し進めることができた。」

※国立交通大学理学院40周年記念誌の「歴代院長の言葉」より、李教授のお言葉を抜粋しました